淡路島　身近な自然・身近な野草　［Ⅰ］

～海岸の植物を見に行こう～

2014 年 3 月

兵庫県淡路県民局

まえがき

淡路県民局では、「あわじ花回廊計画」や「淡路花博」の理念を継承し、地域住民の指針となる“あわじ総合緑花プラン”を平成17年度に策定し、「淡路らしい緑花」「持続可能な緑花」に取り組んでいます。

それを実現する方法として、淡路島に自生する植物に着目し、自生群落の保護育成や緑花活動での活用を平成22年度からパンフレット（淡路島－自然のちからを活かした緑花［Ⅰ］～［Ⅲ］）を配布して呼びかけてきました。今回は、身近な自然環境、とくに海岸域にみられる植物とその生育立地・人と植物の関わりなどを紹介します。

より多くの方々に、淡路島本来の自然植生の美しさを再認識していただき、人と自然の豊かな関係をきずく公園島「環境立島あわじ」の実現につなげていただければ幸いです。

2014年3月

兵庫県淡路県民局長　安倍　茂

海岸植物

海岸に特有の植物を「海岸植物」といいます。海岸植物は、その生育環境により、「はまの植物」「がたの植物」「いそやがけの植物」の３つのタイプに分けられます。

はまの植物

主に砂浜や礫浜（れきはま）にみられるもの

がたの植物

干潟や塩沼地（えんしょうち）にみられるもの

いそやがけの植物

主に海岸の崖や岩場にみられるもの

海岸植物は、水や栄養がとぼしく，高温にさらされ，塩分の影響をうける厳しい環境に生えています．このため，強い植物と思われがちですが、人間による環境の改変に対しては弱い植物です。自然のままの海岸が残されている場所では様々な海岸植物がみられますが、護岸工事がおこなわれたり、海岸での人間活動が大きくなりすぎると衰退します。

淡路島の海岸植物観察ポイント

周囲を海に囲まれた淡路島は海岸植物を観察するのにうってつけの場所です。
とくに、自然がよく残されている吹上浜、成ヶ島、慶野松原は海岸植物の宝庫です。

はまの植物　～砂浜・れき浜～

コウボウムギ

●カヤツリグサ科の多年草。砂浜海岸に生える。風が運んだ砂で埋まっても、それに対抗して地面の上にでてきてよく育つ。
●4月ごろに穂を出す。雄株と雌株がある。雄株の穂は、たくさんの雄しべをふさふさと出し、犬のしっぽのようでかわいらしい。はじめは白い犬で、だんだん茶色い犬になる。

地下茎のところどころに長い毛のような繊維の束があり、これを掘りとると筆になる。別名フデクサ
※地下茎の観察のときは，採りすぎないように注意しよう。

ハマボウフウ

●セリ科の多年草。初夏に白い花を咲かせる。小さな花があつまって球状となったものがさらにいくつもならぶ。花が終わると、紅色を経て薄茶色の果実となる。果実はコルク質の果皮で覆われていて水によく浮かぶ。
●根はニンジンやゴボウのように太く、まっすぐ深くまで伸びている。

葉を刺し身などの飾りに使ったり、天ぷらにして食べたりする。
味と香りはパセリそっくり！

ケカモノハシ

●イネ科の多年草。穂は１本の棒のように見えるけれど、よくみてみると、ぱかっと二つにわかれる。その様子がカモのくちばしのようなので、鴨の嘴。全体に毛がおおいのでケカモノハシ。葉っぱをさわると毛でふわふわしている。

●砂粒が細かい砂丘でみられる。淡路島では吹上浜に多い。夏に穂を出す。

地下には、太さ 1㎜ くらいの根が長くまっすぐにのびている。吹上地区では、ケカモノハシを「かるかや」と呼び、昭和の中頃まで、この根でタワシを作っていた。鳥取県では、この根でほうきを作っていた。

鳥取県のばりんぼうき

ハマゴウ

●シソ科（以前はクマツヅラ科）のかなり背の低い低木。高さ 30cm くらいから、大きくなっても 1m を超えるくらい。砂浜海岸やれき浜海岸に生え、とくに、海岸のうしろの方に大群落をつくる。

●ふつうの木は幹が上に向かって伸び、枝がヨコにのびるが、ハマゴウは幹が地面の上を這うようにヨコに伸び、枝が上にむかう。

●夏になると青紫色のかわいい花をさかせる。果実は、直径 6mm くらいで丸く、熟すと黒紫色になる。コルク質の果皮で包まれていて、海水に浮かぶ。

全体にハーブのようなさわやかな香りがある。昔はこの実をあつめて干し、枕のつめものとして使っていた。よい香りがするのでよく眠れたという人もあるが、香りが強すぎて苦手という人もいる。

ハマヒルガオ

●ヒルガオ科の多年草。白く太い地下茎が地下数 cm あたりに這っている。地表には、葉と花だけがでてくる。

●5 月頃、ピンク色の花を地際に咲かせる。たくさんの花が地面にしきつめられるように咲く様は圧巻。タネは海水にぷかぷかとよく浮かぶ。

●砂浜海岸や礫浜海岸に生え、ときには防波堤のコンクリートの割れ目にも生える。淡路島ならどこの海岸でもみられる。

夏の砂浜を裸足で歩くと足の裏をやけどしそうに熱い。そんなときでもハマヒルガオの葉の上はひんやりとしている。昔のこどもたちは、夏に浜をあるくときに、ときどきハマヒルガオの上で足の裏を冷やしていたという。

ツルナ

●ハマミズナ科（以前はツルナ科）の多年草。ぽってりとした葉の表面には透明のつぶつぶがついていて、水滴か塩がついてるようにみえる。

●黄色い花はとても地味で、めだたない。ツノのはえたごつごつしたタネをつけ、このタネも海水によくうかぶ。

●砂浜の、海藻やヨシの茎などの漂着物が堆積したところによく生えている。

ツルナの葉はおひたしなどにして食べられる。 葉物野菜が乏しくなる夏の時期に食べられる菜っぱとして重宝されていたらしい。 別名ハマチシャ。

ハマニガナ

●キク科の多年草。茎は地下を這い、地上には葉や花だけを出す。葉っぱをちぎると白い乳液がでる。これをなめるととても苦い。
●淡路島では吹上浜と慶野松原でみられる。
●近年とても減っている。

ネコノシタ

●キク科の多年草。葉っぱがぽってりと分厚く、ざらざらしているので猫の舌とよばれる。
●淡路島では吹上浜と慶野松原でみられる。
●近年とても減っている。

スナビキソウ

●ムラサキ科の多年草。初夏には白い花を咲かせる。この花には、アサギマダラという蝶がやってくる。
●兵庫県南部では稀。淡路島では松帆の浦や西浦の海岸に点在する。

がた の植物

「がたの植物」が生える塩沼地とは、塩分を含んだ湿地のこと。干満の影響をうけるが波当たりがほとんどない場所にできる特殊な生態系。「がたの植物」の多くは絶滅が心配されている。

ハママツナ

●アカザ科の１年草。細くて分厚い葉をつける。満潮時には海水におぼれてしまうようなところに生える。
●晩秋にみごとに紅葉する。成ヶ島の塩沼地でみられる。

ハマサジ

●イソマツ科の二年草。園芸植物のスターチスの仲間で、小さいけれどかわいらしい花をさかせる。葉がさじ型なのでこの名前。
●成ヶ島などで見られる。

がけ の植物

アゼトウナ

●キク科の多年草。葉は厚い。秋にタンポポのような花をつける。
●淡路島では南部の崖地によくみられる。

ハマボッス

●サクラソウ科の二年草。初夏に白い花が咲き、果期には赤い鞘がとても美しい。
●崖地に多いが、砂浜にもみられ、慶野松原の松林でもみかける。

ハマナデシコ

●ナデシコ科の多年草。夏から秋に濃いピンク色の花を咲かせる。
●葉は分厚く光沢がある。砂浜に生えることもある。

あとがき

淡路島特有の環境で育まれた自生植物は、“淡路らしい” 植生として、美しい里山や海岸の景観を形成しています。

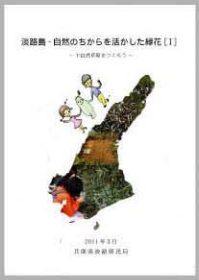
今回は、兵庫県立淡路景観園芸学校（兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科）に執筆を依頼し、淡路島の身近な海岸でみられる在来植物や、それらの植物と人や文化とのつながりなどについて紹介しました。

自生植物は身近でありながら、園芸に使われることは少ないのが現状です。身近にある自生植物の名称やどのような花が咲くのかを知ることで、興味や親しみをもっていただくなど、このパンフレットを淡路らしい緑花の実現に向けて活用してくださることを願っています。

淡路島　自然のちからを活かした緑花　バックナンバーの紹介

Ⅰ．半自然草原をつくろう（2011 年 3 月）

里地の沿道緑花の方法として、“自然のちからを活かした緑花” を提案しました。花壇をつくって園芸植物の花苗を植えるのではなく、沿道の草刈りによって、もとからある草地を保全・活用しようという提案です。

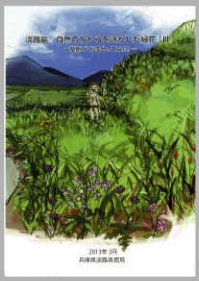


Ⅱ．里の草原を観に行こう！（2012 年 3 月）

“自然の力を活かした緑花” にとりくむには、身近な自然を知ることが大切です。そこで、緑花にとりくむ前に里の草原をじっくりと観察することを提案しました。里の草原の観察のしかた、楽しみ方など。様々なヒントを紹介しています。

Ⅲ．草原づくりをやってみた！（2013 年 3 月）

兵庫県立淡路景観園芸学校では 2009 年から、外来植物におおわれた造成斜面の一角で「里の草原づくり」の実験にとりくんでいます。造成地に在来草原を“再生” することにした背景、方法、そして、その結果どのような草原ができてきたかを紹介しています。



文・写真：　澤田佳宏（兵庫県立淡路景観園芸学校 / 兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科）
デザイン：　西尾祐哉（兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科）
発行：兵庫県淡路県民局　洲本土木事務所まちづくり建築課
TEL　0799-26-3213
（本書掲載の記事・写真について無断転写・複製を禁じます。）

25淡路Ⓟ2-025A4